

---

# 焔の海兵さん奮戦記

むん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

焰の海兵さん奮戦記

### 【Nコード】

N4772Z

### 【作者名】

むん

### 【あらすじ】

瞼を開くと、そこは青い海の世界だった。

普通に暮らしていた社会人男性がONE PIECEの世界に憑依転生。

その憑依先は、なぜか鋼錬の焰の錬金術師ロイ・マスタング。なんでどうしてこうなった？ 突っ込みたいことは山ほどあるが、とにかく生きていこうと努力します。ゆっくり更新していくつもりです。

## プロローグ（前書き）

こちらはONE PIECE×鋼の錬金術師の二次創作となります。  
恥ずかしながら処女作です。

温かく見守っていただければ幸いです。

## プロローグ

その日の俺は、仕事を終えて夜遅く駅のホームにいた。

年度末で気合いを入れて山積みになった仕事のために残業が続く日々の一コマだ。

使い過ぎた頭が少し熱っぽく、ふらふらとしている。PCとらめっこで酷使した目の奥がじわりと痛む。肩や背中筋に石か何かが詰まったように重苦しい。

全身が溜まりに溜まった疲労を訴えている。

自分の身体を労ってやりたいが、後一週間くらいは休めない。せめて早く帰って飯食って寝よう。今は自分を騙し騙し働くしかない。でも仕事は落ち着いたら、その時にガッツリと有給を取ろう。自宅であまりしてもいいし、久しぶりに実家に帰ってみてもいい。

山、森、海、川と日本で揃う自然は揃っているわりに、不便というほど不便でない実家のある田舎町の風景が頭の中に浮かんでくる。ああ、ひさしぶりにアウトドアがやりたい。大自然の中でのんびりと過ごしたくなってきた。

故郷に思いを馳せていると、ふいに冷えた夜風が吹き抜けていった。それが一緒に細かな塵でも運んできたのか、チクンと目に痛みが走る。

唐突な痛みに対して、俺は反射的に目を閉じた。

そして。

目を感じた痛みがようやく治まって瞼を開くと、青い空があった。嘘みたいな本当の話。

一瞬前まで目の前にあった蛍光灯に照らされた駅のホームの風景が消え失せ、南国リゾートの写真もかくやと言わんばかりのコバルトブルーの海と、それよりはいくらか淡い空が視界いっぱいに広が

っていた。

気づけばツンと鼻の奥を突いていた冷気は温く濃い潮の匂いに取って変わり、煌々と白く灯っていた蛍光灯の明かりは燦々と鮮やかに輝く陽光になっている。

(なんだよ、これ。どうなってんだ!?)

今まで生きてきた中で培った常識を大きく逸脱した現象に立ち竦む。

どうにか状況を理解しようとしても、あまりの出来事過ぎて俺の脳ミソは情報を処理しきれなくなる。

やけにデカイ鼓動が耳に付きまとい始めた途端、その早い拍動に合わせて重く鈍い痛みがオーバーヒートしてしまった頭の内側から響き出す。

今まで経験したことのない激痛に堪えきれずにその場で崩れ落ちてしまう。

身体がピクリとも動かない、声の一つも出ない。

このままじゃ、死ぬ、死んでしまう……!!

「ロイ君!？」

死を意識したところに耳へ滑り込む悲鳴のような少女の声と、こちらに近づく足音が何人か分。

痛みを堪えて何とか薄く開けた目だけで声と足音の方を向く。

そこには、見たこともない少年少女が3人。

高校生だろうか？ 逆光で顔とかはよく見えないが、この大人とも子供とも言えない雰囲気はたぶんそうだろう。3人ともそろってライトブルーのラインが入った白ジャージを着ているところからして運動部部員とかかな。

とにかく人が来てよかった!

必死の思いで震える腕を動かして手近な少年のズボンの端を掴み、助けを求める声を喉の奥から絞り出す。

「たすけ…あたま、われる…っっ」

「頭が痛いのか!？」

問い質してくる声に、こくこくと頷く。

途端に3人の雰囲気が見るみる強張っていくような気がした。急に倒れて頭が痛いとなったら、ただ事ではないであろうことは誰にでも容易に想像がつくことだ。彼らも状況が極めて悪いと気づいたのだろう。

「動かさねえほうがいいだろ、これ」

「そうだな。ヒナ、教官を呼んできてくれ!」

「ええ、待っていて!」

緊張の走った会話と、バタバタ駆けていく音が頭上を横切っていく。

これで助かるかもしれない、と思うと一気に張りつめていた緊張が解けた。

相変わらず頭痛は止まないし、本当に大丈夫かどうかも分からない。けれども、いったん抜けた気は戻らず、するすると体中の力が抜けていった。

「おい、ロイ!」

「ロイ、ロイ、しっかりしろっ」

側に残ってくれている少年たちがしきりに叫ぶようにして呼びかけてくる。

意識を落とすなという、焦っているような、怖がっているような

その呼びかけに申し訳なく思うが、これ以上意識を留め続けることは今の俺には難しかった。

(ごめん、少年たち。あとで意識が戻ったら謝るから……)

そうして俺は、心の中で必死になってくれている彼らに手を合わせながら、大きな力に引き離されるようにして意識を手放した。

(そういえば……こいつらがずっと呼んでるロイツ、誰だ……?)

## プロローグ（後書き）

誰だかわかったかもしれませんが、この少年少女三人組は少し後に再び登場します。

## 第一話

次に目を開けると俺はどこかのベッドに寝ていた。妙に硬いそれは、あきらかに普段使っているベッドではない。

どこだよ、ここ。なんだか被せられた毛布や頭を載せている枕も薬臭い気がする。

もしかして、病院、なのだろうか。

「オウ、目エ覚めたか」

ぼんやりと見上げていたやけに高いコンクリ剥き出しの天井を背景に、ひょいっと覗き込んでくる年配の男性が視界に映った。白衣を着ていて、首には聴診器を掛けている。

多分、このおっさんは医者だ。じゃあやっぱり、ここはどこかの病院なのか。

「ここは？」

「医務室だよ」

「どこの？」

「どこって、てめえ、士官学校のだよ」

「……え？」

俺の質問に怪訝そうな顔をしながらも医者は俺の目玉にライトを当てたり脈を図ったりし始める。

普通の病人に対する診察なのでされるがままになる。一通り終わったら、気分はどうだとか、頭は痛くないかとか問診され、少し考えてから問題はなさそうだと答える。

「ん、低酸素症の症状もだいぶ回復しているようだな」

「は…低酸素…？」

「お前なあ、自分の能力で倒れるなんざ、身体張ったジョークかよ」

「……」

「ま、最初は能力者なんか皆そんなもんだ。気にせず制御訓練に励めばいいさ」

カルテに何やら書き込みつつ、ニヤニヤ笑いながら喋る医者に困惑気味の目を向けていると、ぽんぽんと大きな掌が頭のとっぺんに置かれた。

医者はポケットから出した錠剤を幾つか俺に渡し、それを飲み下すの見届けると「安静にしているよ」と言い置いて出ていった。

ボタンとドアが閉まる音がして、一気に室内に静寂が満ちる。

窓から差し込む仄かな月明りだけの中、俺は深く息をついて目を閉じた。

ゆっくりと十数えて瞼を上げてみたが、広がる景色は変わらなかつた。

「やっぱり、夢じゃない…」

どうしたものかと、とりあえず倒れる前の自分の中の記憶をたどる。

すると、なぜか二人分の記憶が浮かび上がってきた。

なんだ…これ。あり得ない出来事に驚いて、慌てて二つの記憶をなぞる。

その作業によって自分のことを思い出していき、ことの異常さにサアツと血の気が引いていくのを感じた。

俺の抱えた二人の人間の記憶。

一つは俺の記憶。ごく普通の日本人男性で、社会に出て数年のサラリーマンである俺自身の二十数年に渡る平々凡々な記憶だ。

そしてもう一つは、この身体の元の持ち主の記憶。15歳になる少年で、今年遠い故郷からはるばる士官学校へ入学した……ロイ・マスタング少年の記憶。

……敢えてもう一度言おうか、この身体の元の持ち主の名は、ロイ・マスタング。嘘でもなんでもなく、本当にロイ・マスタング。

漫画好きな者なら、一度は耳にしたことがあるかもしれない。

日本で有名な漫画『鋼の錬金術師』の主要登場人物の一人といえは分かるだろうか。

出世街道驀進中のエリート軍人にして最凶の焰の錬金術を操る有能な錬金術師。

まさにその人が、この身体の元の持ち主。

驚くのはそれだけじゃなかった。

その彼が存在するのならば、それはおそらく今いるここは鋼の錬金術師の世界と皆思うだろう。

が、このロイの記憶から引き出した情報にはアメストリス、イシユヴァール、錬金術や国軍といった特有の用語が無かった。

代わりにあった情報は、グランドライン、マリンフォード、悪魔の実や海軍。

どう見ても別の人気漫画『ONE PIECE』の世界の情報と用語だ。

身体はロイ・マスタングだけれど、生きている世界はONE PIECEって突っ込みどころが満載だよ。

一番突っ込みたいのは、異世界の赤の他人の身体を乗っ取ってしまった事実だけでもさ。

(もう何が何やら、ほんと、どうしたらいいんだよ)

頭の中が理解しがたいことばかりでぐるぐるする。再びめまいが

してきたような気がして、目元に手を当てて深くため息を吐く。  
どうしたらいいと悩むものの、とっくに理性は答えをはじき出し  
てはいる。

これからどうするか、その答えは一つ。  
身体の持ち主の代わりにロイ・マスタングとして生きていくとい  
うもの。

普通に考えて、俺はロイじゃないんです、実は日本人の一般市民  
なんです、なんて言っても信じてもらえらると思うか？

十中八九頭がおかしくなったと思われて病院送りだろうな。それ  
も檻付きの方のさ。誰でもそうだろうが、俺もそれだけは嫌だ。

檻付き病院を回避したいならば、ロイの記憶を元に以前のロイと  
同じように生活するしかない。海軍士官学校ロイ・マスタング候補  
生として、軍に入るため日夜訓練と勉強に励むのだ。

平和ボケした日本人としては、海賊とか革命軍とか凶悪な奴らの  
蔓延る危険なこの世界で海兵さんをやるなんてまっぴらごめんだが、  
だからといって士官学校を止めるといふ選択肢はない。

何故かという、ロイはなんと悪魔の実の能力者で士官学校に特  
別推薦入学している。その上、海兵志望者向けの奨学金なんてもの  
まで取っちゃっている。

つまり何が言いたいかっていうと、退学すると貰った奨学金+違  
約金みたいなものの返済義務を負うことになるってこと。

それに加えてこれだけの優遇を受けておいて、途中で大きな病気  
も怪我も何もないのに嫌になつたから辞めますでは、世間体が物凄  
く悪くなること請け合い。途中放棄して辞めたが最後、莫大な借金  
背負って世間から白い目で見られて生きていくことになるわけだ。

それも絶対嫌だ、耐えきれないと思ってしまうのがみっちり小  
心者の性。だから辞めたくても辞められない。

結局俺の選択肢はロイとして、未来の絶対正義を背負う海兵さん  
として生きていくことしか残されていない。

それに、だ。悲しいかな、この先また元の世界に帰れる保証はな

い。帰れたとしてもそれはいつになるのかも予測できない。

本当に現実的に考えれば考えるほど、ここで生きていくために口イをやることしか選べないのだ。

こういう時、元の世界で読んでいたような二次創作主人公はかなり楽観的で勇んで新たな世界の大海原へ飛び出していくものだったが、残念なことにチキンとして定評があつた俺はそんな楽観的になれそうにない。

ロイ・マスタングがベースなんだからここでも強くなれる可能性はあると思う。

でも、海兵になつたが最後、海賊の強い奴にドカンと弾き飛ばされるかプチッと潰されて終わるとか後ろ向きな未来予想図ばかり頭の中に浮かぶんだ。

怖い目に合うくらいなら出世しなくてもいいや、しがない事務職を目指そう。兵站あたりのできる限り後方にいる部署を目指していこう。

どうにか強敵と殺し合わないで済むように生きたい、デンジャラスすぎる原作と関わり合いになりませんようにと本気で願っている。夢が無い奴とか言うな。このチキンとか言うな。善良で現実的な小心者と言ってくれたら嬉しいな。

(あー、なんか泣けてきた……)

前途多難な現実のことばかり考えていたら、自然に涙が溢れて枕を冷たく濡らしていた。

俺の気持ちと一緒に、夜は深まっていくのだった。



## 第一話（後書き）

次回、同期の桜とご対面の予定。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4772z/>

---

焰の海兵さん奮戦記

2011年12月17日00時48分発行